

学生によるまちづくり活動への参加と
学生エンゲージメントに関する考察

Consideration on student participation in community development
activities and student engagement

三 岳 貴 彦・美 濃 陽 介

学生によるまちづくり活動への参加と学生エンゲージメントに関する考察 Consideration on student participation in community development activities and student engagement

三岳 貴彦¹、美濃 陽介²

1. はじめに

わが国の人口は 2008(平成 20)年をピークに人口減少に転じている。少子高齢化が進み、都市部と比べて地方では先行して高齢化と人口減少率が高まると推計されている¹⁾。一方で、若年層を中心に地方から三大都市圏(東京圏、大阪圏、名古屋圏)への大きな人口移動が発生している²⁾。特に、東京圏では大幅な転入超過が続いている状態であるが、転入者の年齢構成を見ると、15～19 歳、20～24 歳が大半を占めており、大学進学時や大学卒業後の就職での転入が主な理由と考えられる。

少子化と都市部への移動が伴い、地方での若者が減少していく中で、国は 2018(平成 30)年に「地域における大学の振興及び若者の雇用機会の創出による若者の修学及び就業の促進に関する法律」を施行した。地域における若者の修学及び就業を促進し、地域の活力の向上及び持続的発展を図るため、大学振興・若者雇用創出事業等に充てるための交付金制度の創設等を行い、東京一極集中是正と 2020(令和 2)年時点での地方と東京圏との転出入均衡を目指す事を目標としている。

この事から地方大学は地域における役割は大きく、学生の修学は将来的には地域での就業につながる事が期待されている。

八戸学院大学短期大学部(以下、「本学」)の所在地である青森県八戸市では、2015(平成 27)年に「八戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略」³⁾を策定し、2020(令和 2)年度から 2024(令和 6)年度までの第 2 期「八戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定した。その中でも、高等教育機関等との連携や若者の地元定着の促進を掲げている³⁾が、その中に基本目標の 1 つ、「住み続けたいまちをかたちづくる」ための事業の一つとして「学生まちづくり助成金制度」⁴⁾を実施している。この制度は学生による地域振興や地域貢献に関する活動の促進を目的として、学生が主体となつて行う活動に対し助成金を交付するほか、活動成果の発表と活動実績において地域への貢献度が特に高いと認められる活動等を表彰する「学生まちづくりコンペティション」を開催している。福田ら⁵⁾は、大学生が在学地域のコミュニティ感覚について、居住地でのボランティアやアルバイトなどの経験で、地域での「人とのつながり」がある事が「居住地での居心地の良さ」に影響を及ぼすとしており、「地域」を舞台に学生自身の主体的な活動が認められ、助成金等自治体からも支援されている事は、若者にとっても地元を肯定的に受け止める事につながる。

2017(平成 29)年度に本学ライフデザイン学科の学生有志が「地域での子どもの遊び場づくり」を企画し、「学生まちづくり助成金制度」に申請、選考され採択された。この活動事例を紹介するとともに地域を通じた活動実践の経験が修学意欲との結び付きについて考察する。

2. 活動事例

¹ 八戸学院大学短期大学部介護福祉学科 講師

² 青森中央短期大学幼児保育学科専攻科福祉専攻 講師

1) 八戸市「学生まちづくり助成金制度」について

青森県八戸市では、2011(平成 23)年度から「学生まちづくり助成金制度」を実施しているが、2015(平成 27)年に「八戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、高等教育機関等との連携や若者の地元定着の促進を掲げている³⁾が、その中に基本目標の1つ、「住み続けたいまちをかたちづくる」ための事業の一つとして位置づけ実施している。「学生まちづくり助成金制度」の事業概要については表1の通りである。

助成金については1事業につき20万円を上限と設定され、事業終了後は報告書の提出並びに成果発表会での報告が求められる。また、助成金交付にはヒアリング審査によって選考されるが、表2に示される選考基準に基づき選定される。

表1 学生まちづくり助成金制度の事業概要について⁶⁾

<p>1. 学生まちづくり助成金制度とは</p> <p>八戸圏域連携中枢都市圏を形成する八戸市、三戸町、五戸町、田子町、南部町、階上町、新郷村及びおいらせ町は、学生が自主的に取り組む八戸圏域内の市町村のまちづくりに関する企画を助成金により、支援します。</p> <p>また、八戸圏域内の複数の市町村で活動する場合は、加算し、圏域内で活動する学生を応援します。</p> <p>2. 応募の対象者</p> <p>八戸圏域内の市町村内に所在する大学、短期大学、高等専門学校、専門学校などに籍を置く学生個人、またはその学生で構成するグループが応募の対象です。</p> <p>3. 対象となる企画</p> <p>学生が主体となって行う八戸圏域内の市町村の地域振興に関する活動や地域への貢献活動で、年内に実施・完結する事業または活動の企画が対象です。</p> <p>ただし、複数の企画を応募する事はできません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域振興に関する活動 <ul style="list-style-type: none"> まちづくりに関する調査研究、調査研究を活かした活動 八戸圏域内企業との共同研究・開発 ・地域への貢献活動 <ul style="list-style-type: none"> 八戸圏域内で活動する市民活動団体や地域コミュニティ活動団体との協働による活動 学生自らが企画・運営するボランティア活動事業

表2 学生まちづくり助成金制度の選考基準について⁶⁾

<ul style="list-style-type: none"> ①貢献性：八戸圏域内の市町村の課題解決、活性化、住民生活の向上が期待できるか ②実現性：実現可能な計画になっているか ③専門性：学生生活を通じて得た知識や経験が活かされているか ④独創性：斬新なアイデアやユニークな発想が盛り込まれているか ⑤発展性：事業自体の継続や他への波及効果が見込めるか
--

2) 企画立案

企画立案の背景に、本学ライフデザイン学科^{*1}では公益財団法人日本レクリエーション協会による公認資格「レクリエーション・インストラクター」、「福祉レクリエーション・ワーカー」課程認定校であり、レクリエーション公認指導者資格を取得する事ができる。資格取得を選択した学生は短大1年生修了時にレクリエーションに関する講義、演習、実習科目を修めているが、2年次在学中に資格を活かした活動の場がなかった。

また、一方では八戸市内で毎年6月に開催されている「家族ふれあいウォークラリー大会」(主催：株式会社よこまち・八戸市レクリエーション協会)には地元の幼児・小学生のいる家族が多く参加しており、イベントにはレクリエーション現場実習の一環でこれまで学生も参加していたが、平成29(2017)年は企業協賛の関係から開催されず、「子どもが参加できる地域のイベント」が一つ消えてしまった^{*2}。

レクリエーション・インストラクター有資格者である学生が地域にいるが、地域に活動する場所がない。その一方で、「子どもが遊べる場所が減っている」事を感じ、学生同士も「家族ふれあいウォークラリー大会」がその年は開催されないという話題から、雑談の中で自分たちも幼少期を振り返るとあまり地元で遊べる場所はなかったと気づいた。

その事から、「学生まちづくり助成金制度」を紹介した。レクリエーション・インストラクター有資格者の学生有志(2年生7人)が中心となり「子どもの遊び場の創出」を目的に集団が結成される。2017(平成29)年4月からミーティング等を重ね、事業目的、事業内容、事業実施により期待される効果について表3の様に整理した。団体名は協議のうえ、「わくわく☆はちたん遊びのワ」となった。本学の「八」戸学院大学「短」期大学部の略称で使われる「はちたん」。「ワ」には「参加者が増え、遊びの『輪』が広がって欲しい」という思いと、『わくわく』という躍動感、気持ちの高まりからこみ上げる『わっ』とした気持ち」を表す擬音語をかけて命名された。

その後、八戸市からの審査後、2017(平成29)年6月30日に助成金交付の決定が通知され、翌7月から活動を展開した。7月から事業の総括となる2018(平成30)年2月までに開催したイベントのスケジュールは表4の通りである。まずは8月以降に実施するレクリエーションプログラムの検討、遊具の作成を行った。参加する児童が幼児から小学生までとなる見込みから安全性のほか、年齢、学年によって簡単に難易度を変える事ができるものを用意する事とした。投擲のゲームを基本とし、開催場所のスペースや参加年齢によって遊具を付け加えていく事で方向が決まり、遊具の一部を作成した。



図1 遊具作成の様子(的当て)



図2 作成したフープディスクゲッター

表3 「わくわく☆はちたん遊びのワ」活動内容について

<p>事業目的</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供たちへの遊び場の提供を増やしたい。 ・街の活性化に貢献したい。 ・活動を通して地域の人々と交流の機会を作りたい。 ・資格を活かす場を広げたい。 <p>事業の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・八戸市内在住の児童(幼児～小学生を想定)を対象に、8月から12月にかけて、月に1回程度中心街、児童館等でレクリエーションの遊具を使った遊び場コーナーを開催したい。 ・レクリエーション遊具の多くは短大保有の物があり、それを借用する事で用意できる。また、資格取得時の授業にて物品の準備やゲーム進行等も理解しているので円滑に事業を行う事ができる。 <p>参加者の対象者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・八戸市内在住の児童(幼児～小学生)を対象。 <p>事業実施により期待される効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供たちの居住地や街中に遊べる「場」を提供できる。 ・無人の公園と違って学生が見守る中でゲームやイベントを行うので子供たちの安全性に配慮を払う事ができる。 ・例えば小学校高学年と低学年で混ざって遊ぶといった「異年齢集団」で共に遊ぶ機会が少子化に伴って減少しているが、事業を通して異年齢間の交流機会を作る事ができる。 ・既存のイベントに合わせてレクリエーション事業を開催する事で参加者の増加、活性化が期待できる。

表4 「わくわく☆はちたん遊びのワ」開催イベントの企画案について

<p>8月 はちのへホコテン！へのイベント開催^{*3}</p> <p>9月 はちのへホコテン！へのイベント開催</p> <p>10月 短大キャンパスを使ったイベント開催</p> <p>11～12月 市内児童館等での遊び場教室開催</p>

ここで、8月以降に開催した事業概要を整理する。尚、各イベントには安全配慮も検討した上で、学生まちづくり助成金を活用してレクリエーション保険も契約している。

・第1回

開催日時：2017(平成29)年8月27日(日)

開催場所：八戸市中心街

参加者数：幼児(～6歳)ー74人、小学生(6～12歳)ー65人、計139人

概要：はちのへホコテン！イベント内で開催。初めての開催だった事、当日参加できる運営ス

スタッフが2年生3名での準備のため、多くの種目を用意すると混乱する可能性もあり、フープディスクゲッター、ディスクゲッター9の2種類のゲームに絞って実施した。



図3 8月27日の様子(フープディスクゲッター) 図4 8月27日の様子(的当て)

・第2回

開催日時：2017(平成29)年9月24日(日)

開催場所：八戸市中心街

参加者数：幼児(～6歳)–120人、小学生(6～12歳)–131人、計251人

概要：はちのへホコテン！イベント内で開催。第1回で会場の様子が理解できたので、フープディスクゲッター、ディスクゲッター9、ラダーゲッターの3種類のゲームで実施した。また、運営スタッフには2年生4名の他、1年生6名も出席した。



図5 9月24日の様子(ラダーゲッター)

図6 9月24日の様子(フープディスクゲッター)

・第3回

開催日時：2017(平成29)年10月28日(土)

開催場所：八戸学院大学・八戸学院大学短期大学部美保野キャンパス

参加者数：幼児(～6歳)–24人、小学生(6～12歳)–33人、成人–13人、計70人

概要：学園祭で開催。子供連れの家族が学園祭に参加する可能性があり開催した。また、スペ

ースの広さとキャンパス内のため、荷物が多くても運搬に困らない事からディスクゲッター9、ラダーゲッター、ディスコン、的当てを実施した。当日の運営スタッフは2年生4名で実施した。



図7 10月28日の様子(的当て)



図8 10月28日の様子(ディスコン)

・第4回

開催日時：2017(平成29)年11月25日(土)

開催場所：八戸市江陽児童館

参加者数：小学生(1～3年生)ー30人、計30人

概要：江陽児童館の運営主体である八戸市社会福祉協議会の理解もあり開催。江陽児童館職員との事前打ち合わせから、「参加児童の事前登録」、「施設の広報紙(江陽児童館だより11月号)でイベント告知」を行った。また、運営スタッフとして2年生4名の他、1年生が6名出席した。運営スタッフの参加人数が多かった事、児童館が遊具の保管に協力してくれた事から、クオリティ、スカットボール、ラダーゲッター、ビーンボウリング、ディスクの他、体育館での自由時間で児童との交流を図った。



図9 11月25日の様子(クオリティ)



図10 11月25日の様子(スカットボール)

3. 学生による事業の成果と課題

計4回のイベントを開催し、延べ490人の参加となった。4回の活動を終え、学生自身の振り返りでは主に4つの視点からの成果や課題が挙げられた。

①イベントの企画運営についての学び

- ・はちのへホコテン!では屋外での開催のため、雨天時の計画も立てた。天候を踏まえた内容となり、色々と制限を感じる部分もあったが、色々と工夫、アレンジを考えたのでそれも学びや発見だったと思う。
- ・自分達のイベントは無料だったが、来場者から無料か有料か問い合わせを受ける事があり、掲示物等案内の工夫も必要と感じた。
- ・少なからずイベントに興味を持った保護者といった成人も参加があった。参加対象者が不特定のイベントの場合はより遊具やルールの工夫を加えても良いと思う。
- ・遊具の耐久性が気になった。的を当てたり投擲するゲームなので、次第に消耗する。
- ・未就学児の参加が多かったが、児童館での参加は小学生低学年が中心で、年齢層が異なり子供達の雰囲気やイメージが今までとは違った。年齢が上がるとよりアクティブに遊びに参加でき、ゲームやルールの理解力が上がる事が分かった。子供への関わり方、指導法をもっと習得する事が必要と思った。

②児童が遊べる場所の拡がり

- ・八戸市中心街や大学・短大という場所は子供の基準で言えば日頃から行く場所ではないので、活動を通して、子供達にとって「非日常の遊び場」としての機会創出と提供につながった。

③地域の団体・施設への関与

- ・はちのへホコテン!の事業に参加し、中心街活性化への取り組みに関わられた。
- ・江陽児童館の指定管理者である八戸市社会福祉協議会とも連絡をとり、地域福祉に取り組む団体ともつながった。

④学生(運営スタッフ)の参加頻度

- ・活動してよかったのは、スタート時のメンバー以外の学生もイベント参加や協力があり、「輪」の広がりを実感できた。
- ・学生の中で欠席したり、各イベント活動に参加に悩む理由が「交通手段がない」、もしくは不慣れた事だった。公共交通機関の利便性が高まれば参加者も増える見込みがあった。
- ・団体発足時から「参加希望者」だけで始めたグループだったが、その中でも次第にイベントの参加に積極的、消極的な学生に分かれてしまった。この事で実際に「広報」と「総括」の役割で影響してしまった。

4. 考察

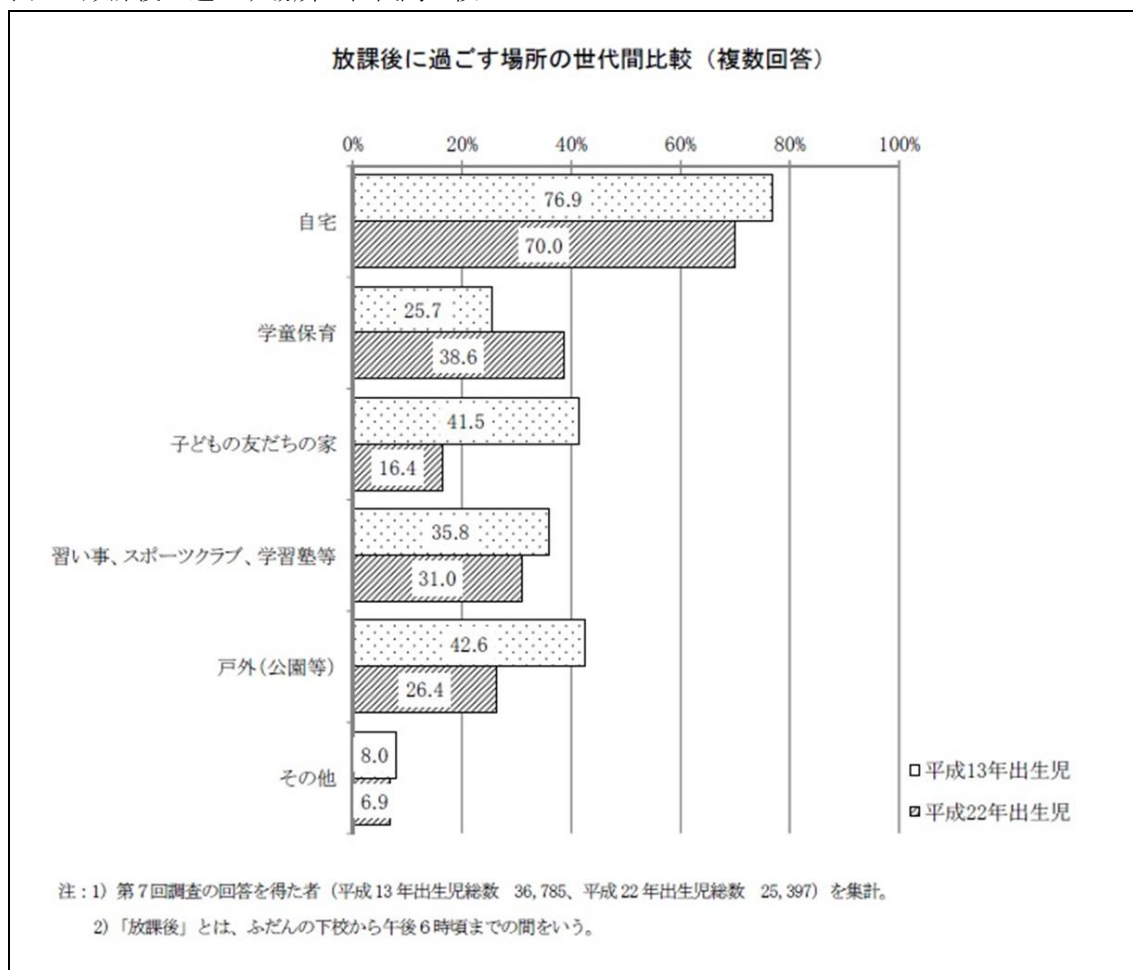
活動に対する学生自身の振り返りでは、「①イベントの企画運営についての学び」、「②児童が遊べる場所の拡がり」、「③地域の団体・施設への関与」、「④学生(運営スタッフ)の参加頻度」の視点での気づきがあった。

「①イベントの企画運営についての学び」については、これまでの学習から実践と移り、プログラムの展開や対象者に合わせたゲームやルール作りといった点で工夫を重ねた経験が学びになったと思われる。レクリエーション・インストラクターには対象者によって課題も変わってくる。学生の振り返りでは幼児や小学生を対象に関わった事で対象年齢が上がるとよりアクティブに遊

びに参加でき、ゲームやルールの理解力が上がる事を述べており、ライフステージに合わせた配慮や工夫⁷⁾の必要性を体験から感じ取れたものと思われる。

「②児童が遊べる場所の拡がり」については、学生自身が幼少期を振り返って比較した中での考察となる。その事から、児童が遊べる場所の縮小しているという問題は現在の課題ではなく、以前から起きていた問題とも考えられる。森川⁸⁾は都市公園が遊具事故の対応や管理費の削減で固定遊具の撤去が進み、更に緑化の推進という点で児童が遊ぶ事のできるスペースが縮小している事を指摘している。また、厚生労働省の「第7回21世紀出生児縦断調査(平成22年出生児)の概況」⁹⁾では児童が放課後をどのように過ごしているのか調査しており、「自宅」で過ごす割合が最も高い。「21世紀出生児縦断調査」は、21世紀の初年である2001(平成13)年に出生した子を継続的に観察している調査と2010(平成22)年に出生した子の比較対照等を行う事で、少子化対策などの施策のための基礎資料を得ることを目的とした調査で、調査時点での児童の年齢は、7歳(小学1年生)での比較である。放課後に過ごす場所として「戸外(公園等)」は減少している事がわかる。石川¹⁰⁾は、外遊びの「空間」を創出する事で児童にとって「仲間」と「時間」を作る事につながると指摘している。このから、児童からすれば日頃行く事がない街の中心街や大学のキャンパスで「遊ぶ場所」が存在する事は遊びを通して生活の場が拡張されると考えられる。

表5 放課後に過ごす場所の世代間比較



出典:「第7回21世紀出生児縦断調査(平成22年出生児)の概況」p6

「③地域の団体・施設への関与」については、はちのへホコテン！事業者や児童館職員からの関わりや協力を得た体験から生まれたが、児童だけでなく学生自身もまた、地域での交流する経験の有無で影響したかと考えられる。学生自身も自宅と学校以外の「過ごす場所」が少なく、今回の活動を通して実際に地域団体と関わった経験から考察につながったものと思われる。

「④学生(運営スタッフ)の参加頻度」については、一度活動を実施すればそれに関心を寄せて運営に参加する学生が増えたこと、そして、学年を越えた学生間の交流を好意的に捉えたものと考えられる。また、学生まちづくり助成金で交通費補助があり、参加しやすくなったことも好意的な意見につながった。一方、当初は7名の学生で活動を始めたが、後期にあたる2017(平成29)年10月以降、2年生4名が中心となって活動しており、参加頻度の二極化が見られたことが課題として捉えられている。

羽野田¹⁴⁾は、大学生の地域活動への参加について、まず、参加しない理由について活動に関心がないのではなく、参加の仕方がわからない事に課題があり、何らかのきっかけがあれば、地域活動に力を発揮する可能性がある事を指摘している。その上で地域活動への参加がその後の地域活動の参加にどのような効果をもたらすか3つの類型を示している。第1に、もともと地域活動に熱心で機会提供の有無に関わらず継続的にさまざまな地域活動を行う「地域活動アクティブ群」、第2に地域活動の機会提供によって地域活動への意欲を高め行動に移し始める「地域活動ウォームアップ群」、そして第3に地域活動の機会提供を職業キャリアの展開に活用する「地域活動ポテンシャル群」の三つである。

今回、地域活動に参加した2年生は、「八戸市学生まちづくり活動助成金」制度がきっかけとなり、自治体の取り組みが学生の地域活動参加の促進する役割を果たしていると言える。また、参加学生の活動後のフィードバックを重ねる事で短期大学卒業後の地域活動の参加の継続、促進につながる可能性を示している。

また、学生の参加頻度には積極的な学生と2017(平成29)年10月以降の参加が乏しい消極的な学生との二極化があったが、この活動はレクリエーション・インストラクター有資格者である2年生にとって、これまでの学習を活かした「実践の場」でもある。学生の学習と発達について山田¹⁵⁾は「学生エンゲージメント」の概念を定義している。学生エンゲージメントとは、「大学生の学習と発達を促すために、彼らの置かれている状況や文脈も考慮しつつ、大学が提供する制度や環境、教職員が日常的に行う教育・指導等における深い関与、学生が自らの意志で選択し、学びに対して主体的に関与するというプロセスや一連の経験、そして大学、教職員、学生それぞれが払う関与の質と量の相互作用やダイナミクスを捉える概念」としている。

今回の事例では、既にレクリエーション・インストラクター資格に必要な科目は修めており、学生は完全な「授業外学習時間」での取り組みである。その状況下で地域活動への参加と組織が継続したことを考えると、学生は潜在的に積極的な参加、学習意欲を持っており、大学の教育活動に組み込んで学生とより強い結びつきで取り組めば学習効果としても更なる可能性を示している。但し、大学の教育活動に組み組んだ際にも注意は要する。学生の能動的な学習の進め方としてアクティブ・ラーニングがあるが、丹藤¹⁶⁾は「アクティブ・ラーニングの形態をとったとしても、モチベーションが欠ければ、エンゲージしていることにならず、またモチベーションが強くてよいアクティブ・ラーニングに恵まれなければ教育は彷徨う」と指摘し、「モチベーションとアクティブ・ラーニングは互いに高め合うシナジー効果を発揮しながら、より高次のエンゲージメントに発達していく」ものと考えられる。

そして、継続して活動した学生が次第にグループの中心となる中で新たに1年生が参加するなど、緩やかな関係の中で集団の参加者の拡がりが見られた。田島¹⁴⁾は大学での学外学修プログラムの地域人材育成としての有効性について、学生がどの様に変化を遂げているかを検討する中で、正規のプログラムに参加する学生の中にはプログラムから離れても自主的に活動を継続する学生らがあり、その後、熟達者となりコアグループを形成する。そして、プログラムの新規履修者を受け入れて知識やスキルを伝えて相互交流を深め、持続可能性が担保される集団へと形成される特徴を挙げている。上述した学生エンゲージメントの定義を踏まえると、今回の事例は「授業外学習時間」での取り組みであったが、大学による正規の教育プログラムとして地域で活動できる環境を整えたり、学生の活動の指導や支援でのかかわりを深め、学生の主体的な選択や意思で学習に取り組めるよう配慮されれば、より学生エンゲージメントを促進する活動実践として展開する可能性も考えられる。

5. 結語

2017(平成 29)年度に本学ライフデザイン学科の学生有志が「地域での子どもの遊び場づくり」を企画し、この活動事例を紹介するとともに地域を通じた活動実践の経験が修学意欲との結び付きについて考察した。学生は地域での活動参加のきっかけがあれば活動に参加し、力を発揮する可能性があるが、自治体による「学生まちづくり活動助成金制度」が「きっかけ」としての装置となり、レクリエーション・インストラクター有資格者の「力」を地域で発揮する事につながったと言える。レクリエーション・インストラクター資格のスキルを活かして参加する事は学生の学習や発達を促進する可能性を持っており、学生のモチベーションと大学のアクティブ・ラーニングをお互いに高め合うことでより高次のエンゲージメントを生む可能性があると考えられる。そこに地域活動で出会い、協力が生まれた団体や参加者との交流が更なる高みにつながる可能性がある。

また、先行研究等確認していく中で、レクリエーション・インストラクター受講中の学生に対する調査研究は見られたが、資格取得後の活動事例を取り扱う研究は少なく、有資格者の資格取得後の活動を更に調査する事は、今後の有資格者の活動参加の推進やレクリエーション・インストラクター有資格者による組織化についての研究に寄与する可能性が考えられる。

注釈

- ※1 ライフデザイン学科は2018(平成30)年度に学生募集を停止した。
- ※2 「家族ふれあいウォークラリー大会」は、新たな企業協賛を得て2018(平成30)年度からイベントを再開したが、2020(令和2)年度はCOVID-19の対策から開催されていない。
- ※3 はちのへほコテン！とは、八戸市中心街の活性化を目指し、5月から10月(7月を除く)の毎月1回、最終日曜日に中心商店街のメインストリートを交通規制し、歩行者天国にして行われるイベントである。主催ははちのへほコテン実行委員会、事務局を八戸商工会議所地域振興課が担当している。共催として、八戸中心商店街連絡協議会、八戸商工会議所、株式会社まちづくり八戸が加わり、八戸市も後援としてかかわっている。

文献

- 1)厚生労働省編「厚生労働白書〈平成27年版〉」日経印刷 2015
- 2)「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン(令和元年改訂版)」
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/info/pdf/r1-12-20-vision.pdf>
2020(令和2)年12月15日閲覧
- 3)八戸市「第2期 八戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略」
<https://www.city.hachinohe.aomori.jp/material/files/group/3/machihito.pdf>
2020(令和2)年12月15日閲覧
- 4)八戸市「第2期 八戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略付属資料 令和2年度 主要事業一覧」
https://www.city.hachinohe.aomori.jp/material/files/group/3/sougousenryaku_r2syuyoujigyguichiran.pdf
2020(令和2)年12月15日閲覧
- 5)福田みのり・中村洋「在学地域への大学生のコミュニティ感覚に関する予備的考察」山陽小野田市立山口東京理科大学紀要第3号 41-47 2020
- 6)八戸市市民連携推進課「学生まちづくり助成金制度 平成29年度募集要項」八戸市 2017
- 7)公益財団法人日本レクリエーション協会編「楽しさをとおした心の元気づくり レクリエーション支援の理論と方法」公益社団法人日本レクリエーション協会 2017
- 8)森川みゆき「子どもたちの身近な遊び場を考える--プレイパークの現状」八洲学園大学紀要第7号 61-65 2011
- 9)厚生労働省「第7回21世紀出生児縦断調査(平成22年出生児)の概況」 6 2018
- 10)石川基子「公園における「あそび場」の実践報告(第1報):子どもの外遊び空間の回復とその波及効果」埼玉学園大学紀要第18巻 293-298 2018
- 11)羽田野慶子「若者と地域活動:福井市における大学生のまちづくり活動の事例から」東京大学社会科学研究所社会科学研究第65巻1号 97-116 2014
- 12)山田剛史「大学教育の質的転換と学生エンゲージメント」名古屋高等教育研究第18号 155-176 2018
- 13)丹藤進「大学生におけるエンゲージメント、フロー体験、ポジティブ感情の研究」青森中央学院大学研究紀要第30号 191-210 2013

- 14)田島喜代美「地域活性化を目指す学生エンゲージメントの促進—文部科学省「大学教育再生加速プログラムテーマⅣ長期学外学修プログラム」の継続と成果—」浜松学院大学研究論集第16号 119-134 2020